
「魔法」のない世界 青春研究会の日常

犀川 匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「魔法」のない世界 青春研究会の日常

【Nコード】

N0066Z

【作者名】

犀川 匠

【あらすじ】

少しハイテクな街のちょっと賑やかな学園。そこにできた過激(?)

な部活。部活でありながら会とつけるあたりどういう見だ? と思うも渋々入部した主人公。その他の部活や委員会、果ては生徒会を巻き込みながら部活動(遊び)をしていく。

「……こんな感じ?」

「……まあ、そんな感じだ。他にも播術だったりボコボコにしたり

……色々あったが、それはそれだ」

「……結局、これ何に使うの？」

「……さあ？」

えっと、こんな感じでコメディー中心で、異能的なアクションとかとマシンの戦闘だったり……欲張り気味で展開していきます。楽しんでいただければ幸いです。それでは

青春研究会（前書き）

第一話は第二話の時点よりかなり先です。プロローグでありながらエピソードです。

青春研究会

今日最後の授業が終了し、俺は家で勉強する分だけの教材をリュックに詰め、教室から出る。

教室からなら無意識でも辿り着けるほどには行き来した道。歩きたびに揺れるリュックを気にしながら歩く。

そういえば、このリュックはギコから「紐緩くしないとダサいよ！」と言ってきて、渋々緩くしたんだっとな。

ギコよ、走るときに当たって痛いだよこれ。直していい？

……あ。確か……ギコにそう言われた日って、部室ができた日だったような……。

考え事をしながら、旧校舎の1階廊下を歩く。部室や倉庫の扉が左の視界を流れていく。そして、奇妙な扉が目に残まる。

ああ、そうか。こっちの部室だったな。

その扉には、所狭しとバカでかく文字が書かれている。それも毛筆。さらに達筆。芸術に疎い俺でも「うまい」と分かる。ただ残念なことに、書く場所と言葉がおかしい。芸術に疎い俺でも「バカだ」と分かる。

『青春研究会』

これは俺の所属する部活（会？）だ。

言っておくが、俺は入りたくて入ったんじゃない。ここ大事。

そして俺はこの部室をスルーして、さらに奥へ進む。

この部屋も、最初はドアに書いてある通りの部室だった。だが、この部室の両隣の部室の方々から苦情が寄せられ、一番端の部屋に移動した。苦情の内容は色々だが……まあ軽いテロ行為があったのだ。

俺が一度、「このドアの字、消さないのか？」と聞いてみたところ、この字を書いた張本人、モミジいわく「トラップですよ、トラップ」らしい。まだテロ行為を続けるのか。誰を罠に掛けるつもりだ、誰を。

そして一番奥の部屋、旧校長室に辿り着いた。

最初、俺たちの部室が校長室と聞いた時は驚いたが、どうやら譲り受けたのではないらしい。そう、勝ち取ったのだ。ホント、どんな汚い手を使った事やら……。

隣の部屋は空き部屋になっていて、それもここが選ばれた一つの要因だろう。公共の福祉ってやつだ。

……まあ、その部屋はレイナがピッキングして、俺らの物置になっているが……、公共の福祉はないな、うん。

今更だが、俺はこっちで合っていたのだろうか。

もっと普通の学園生活でもよかったのではないだろうか。

俺は目立ちたがり屋ではない。それなのに今となっては学園で俺の名前を知らない人はいない。有名人と言えば聞こえがいいが、結

局目立っているだけでこっちに利益はない。強いて言えば気疲れという不利益が生じる。

その原因の一端として、この部活だ。第一、名前自体が目立ちまくりだ。こんな部活、この学園に存在してていいのか？

……作ったのは俺たちだけどなっ！ チクショウ……。

まあ、作らなければよかったとは言わないが、正しかったとも言いがたい。

もちろん作ろうと言い出したのは俺じゃない。「部活を作るのは、オレの夢だったんだ……」と気持ち悪い顔で言いだしたのはレンタで、同じクラスのギコが便乗。シュウマは「面白そうじゃないか」と俺とカギハラを誘い、最終的にカギハラが根負けして俺も渋々みたいな流れだった。

まあ確かに面白い。

だが、やり過ぎだ。

「（ガチャ）」

「おう。やっと来たか。遅刻した奴はこれが終わってからだぞ」

「お前等早すぎるだろ……。そしてお前はゲームするキャラだったのか」

「まあシュウマはキャラがブレまくるのがキャラだからね。お。やった6キタ！」

「ていうかギコ、お前がこのゲームもってきたのか？ ……いや、まあいいけどさ……。お前6だと赤いマスだぞ」

「え！ ウソマジ！？ うわー、このタイミングでか〜」
「よっしゃ！ コウの馬鹿め！ これで俺にも逆転するチャンスが来たってことだな！ いくぜ！ ディステイニ ……、サイコ口振るのって、英語でなんて言うの？」
「チキンカレーだ」
「よっしゃ！ ディステイニ・チキンカ ……、流石に気付くわっ！」
「チイ、おいしい。 …… って、おいレンタ、なんかミサイルが飛んできたぞ」
「はあ？ さつきから後ろで何言って …… ってえええ！？」
「ワイイ！ スタートまで戻さてやんの。さつき逆転とか言っていなかったけー。ムフフ」
「くう！ ちくしょう！ 一体誰だ！ 俺にミサイル撃った奴は！ 倍にして返してくれるわ！」
「私ですけど」
「お前かよ！ なんか納得だわ！」
「さすがにえげつないな、モミジは。ホント最初のキャラはどこへ行った事やら……」
「失礼ね。私最初からキャラなんて変わってないわよ」
「そうか、なおの事ひどいな」
「千波……。俺は？」
「お前実は気にしてたのかシユウマ！」
「……ちわーッス。遅くなりましたー。おやすみなさい」
「おうレイナ……。って、寝るなよ。お前授業中も寝てただろうが」
「ボクの平均睡眠時間……。なめないでください」
「何を誇らしげに」
「じゃあ寝ますんで、なんか用事あったら起こしてください。ていうか、用事があるとき以外は起こさずにいただければ幸いです」
「ハイハイ。いつも通り、部活終了まで用事ないと思うぞ」
「ありがたやー……。カー」

「……………」

「はい。ゴール」

「うおお！ 負けたー！」

「いやレントアロウさんは最下位でしょう。そう言うセリフは追いつけそうな人が言うものですよ」

「お前のせいで最下位なんだよ、ちくしょう！」

「流石は才色兼備腹黒娘……でもこっちも負けてられないんだよ！最後のミニゲームで逆転して見せる！」

「右に同じく」

「右に同じく！」

「いや、お前の右に誰もいないだろ。強いて言えば、初代校長がいるが」

「嘘！？ こういうのって相手から見るとじゃないのか！？ そんなんで俺が肖像画と同じくなってるんだよ！」

「髪の薄さとか」

「ハゲてねえよ！ フツサフサだわ！」

「あなたの場合。知識の薄さじゃないかしら」

「お前はさつきから一言多い！」

「ゴール！」

「ゴール」

「え！？ 嘘！？ みんな早っ！」

「お前がモタモタしすぎなんだよ……、ったく」

……………いや、楽しいんだけどさ。

「……………なあカギハラ。なんか喋らないのか？」

「……………喋ってるんだけど……、みんな賑やかで……………」

「いや、お前の声が小さいだけだと思うが……、そう言えばお前、

「ちやっかり2位だな」

「……うん。目立とうと思って……。ダメ？」

「いやダメじゃないが……、なんか目立つベクトルがおかしい気がする……、まあいいか。よし！ レンタ、代われ」

「はあ！？ ちょっと待てよ！ コントローラーまだ一つ残ってるんだろ！」

「おい、起きろレイナ！ 出番だ！」

「待ってました！」

「なんで！？ なんで今起こした！？」

「うるさいどけ、最下位」

「あう……」

「よっしゃ」

「……チナミ君……。なんか。レンタロウ君、可哀想だよ……。ほら……」

「ずーん」

「……確かに。□で『ずーん』って言ったことはさておき、確かに可哀想だ」

「フッフッフ……、実はね……レンタよ……」

「！ な、なんだ！？」

「あ。明るくなった」

「……なりましたね……」

「もう一つ！ コントローラーを用意しているのだよ！」

「な、なんだって！！ ナイスだ！ コウ！」

「……でもコウ、接続するところが六つしかないぞ」

「そりゃもちろん」

「え？ ……じゃあ……」

「コントローラーあっても意味ないね！」

「上げて落とされたあああ！」

「……まあ実は接続増やすやつも買ってきたんだけどね……」

「あ、上げて落とされて持ち上げられた！ やべえ、ちょっと泣き

「そうだ！」

「じゃあみんなで行きますか！」

「おう」

「ええ」

「よっしゃ！」

「そスね」

「……うん」

「ああ」

「……まあいいか、今は。」

青春研究会（後書き）

ほぼ全部……て言うか全部コメディーでした。

会話だけで地の文がないと誰が何を言っているか分かりずらいと思うのですが、できるだけ個性を出して、分けてみました。

今回は全員名前をカタカタにしました。後で漢字が出てきます。

もし面白くて、次も見えていただければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0066z/>

「魔法」のない世界 青春研究会の日常

2011年11月30日16時55分発行